

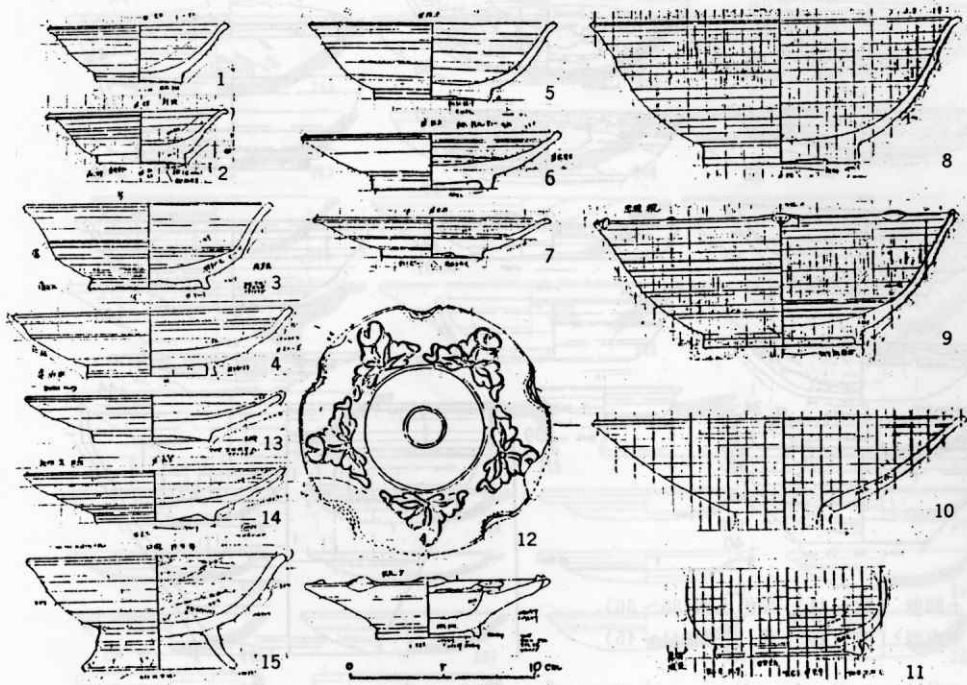
## 滋賀県・鴨遺跡出土陶器

兼 康 保 明

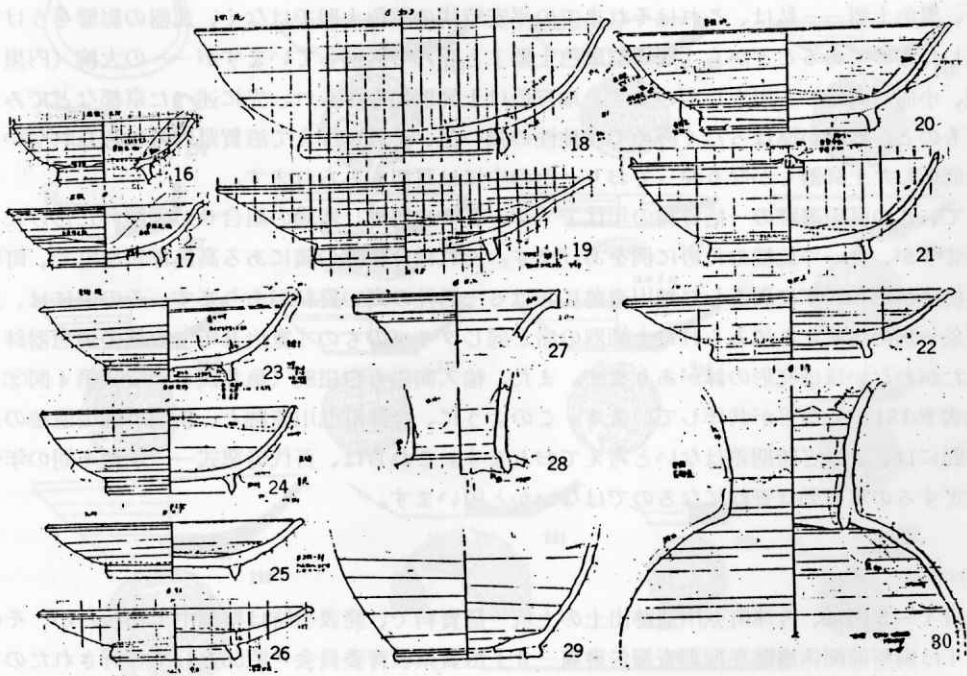
滋賀県の兼康です。お配りしました土器の実測図（本書P 151～152）の載っております、プリントについて、説明させていただきます。これは、昭和54年に滋賀県教育委員会が発掘しました、高島郡高島町鴨遺跡から出土した土器の資料です（『鴨遺跡』、高島町教育委員会、昭和55年刊。正報告書未刊）。それでは順に説明いたしますと、1枚目（本書P 151,第1図）は1番から12番が緑釉、13番から15番までが無釉のもので、2枚目（本書P 151,第2図）に入りまして、これは今日考えていただきたい問題ですが、16番から30番までが灰釉です。3枚目（本書P152,第3図）の31番から35番は、土師器のうち代表的なものを、特にここへ抽出しておきました。次に35番から36番、これは黒色土器です。それから37番から40番までは、ちょっと現在、どういう評価をしていいのかわからないもので、須恵器ではないかという意見のひと、ロクロで成形した須恵器風の土師器ではないかというような意見が出ておりますが、まだ結論の出ない土器です。最後に41番から45番まで、これは須恵器です。この資料は、鴨遺跡のトレンチ10より出土した一括資料です。そこで次に、トレンチ10での出土状況と出土量について述べたいと思います。出土状況は、トレンチ内の包含層の下層——約80cmほどの厚さがあります。この層の中から、一気に廃棄されたような状態で、ほぼ完形に近い土器がどっと出土するわけです。このトレンチ10から出土した遺物の総数は、実測可能なもので1,308個でした。この内訳は、須恵器224個、土師器766個、黒色土器103個、緑釉陶器102個、無釉陶器86個、灰釉陶器27個です。また器形別の内訳をみると、供膳形態の杯・椀類では、土師器椀が732個、須恵器杯が122個、以下無釉陶器椀66個、黒色土器椀59個、緑釉陶器椀54個、灰釉陶器椀13個です。また、煮沸形態のものでは、土師器の甕が11個、黒色土器の甕が42個と、さほど多くはありません（『木簡研究』第2号、『日本歴史』381号参照）。

このトレンチ10の一括資料で最も注目されるのは、トレンチの最下部から出土した『貞観十五年九月十七日』（873）とはっきり書かれた、全長約166cmの長大な木簡です。これによって、このトレンチの遺物の年代の一端をおさえることができるのではないかと考えるからです。ちなみにこのトレンチ10から出土した皇朝十二銭は、和同開珎・萬年通宝・神功開宝・隆平永宝・長年大宝・饒益神宝・寛平大宝の7種類が出土しています。以上が鴨遺跡についてです。

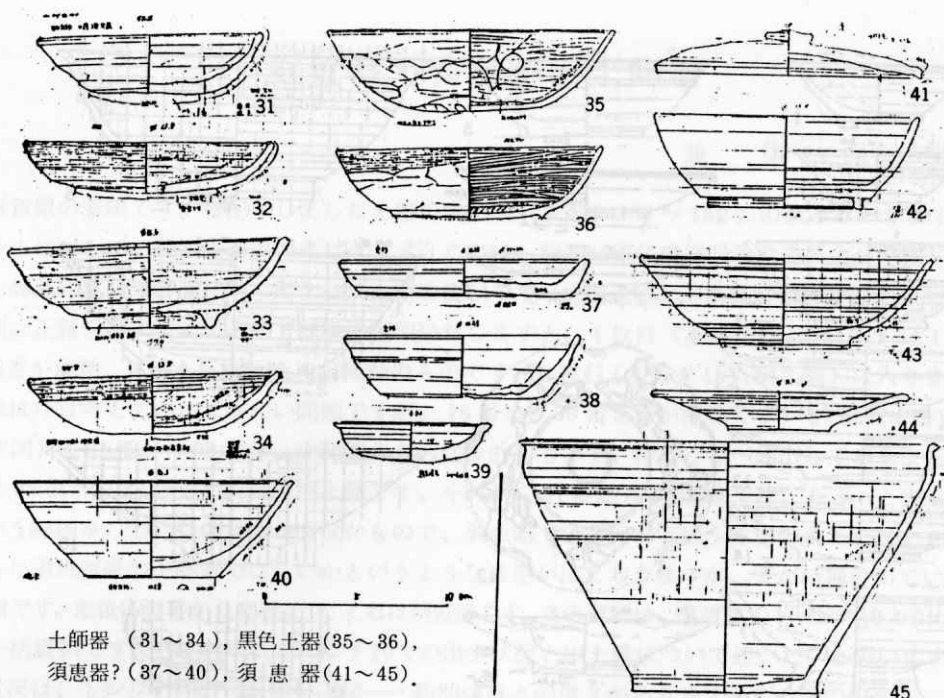
それからもうひとつ、灰釉末期の資料を紹介させていただきます。鴨遺跡と同じ高島郡内にあります今津町弘川遺跡で、昭和55年の調査で良好な土坑の一括資料が出土しています（本書P153～154,第4,5図）。この土坑は、弥生時代中期の竪穴住居の真中をくり抜いてあけた大きな穴で、この中に遺物が一括して廃棄されておりました。土坑内の土層は、極めて慎重に調査した結果何層かに分けられましたが、その最上層と最下層の土器片がピッタリ接合しますので、ほぼ一時の廃棄によるものと考えています。この一括遺物の中に含まれている灰釉陶器は、先程から話に出ています百代寺窯式に相当するもので、広久手E・F窯にみられる口縁部を折返した高台のつく皿や、広久手E窯にみられるような耳皿、さらに椀、皿などがあります。この灰釉陶器に伴出する他の土器は、寛治五年（1091）の墨書銘をもつ須恵器鉢が出土した左京四条一坊のSE-8（P89, 寺島第2図）にみられるE 231～233といったタイプの土師器の小皿——口縁端部を内側へ曲げ込んだもの一、



第1図 鴨遺跡出土 緑釉陶器 (1~12 緑釉; 13~15 無釉<素地>)



第2図 鴨遺跡出土 灰釉陶器



土師器 (31~34), 黒色土器(35~36),  
須恵器? (37~40), 須恵器(41~45).

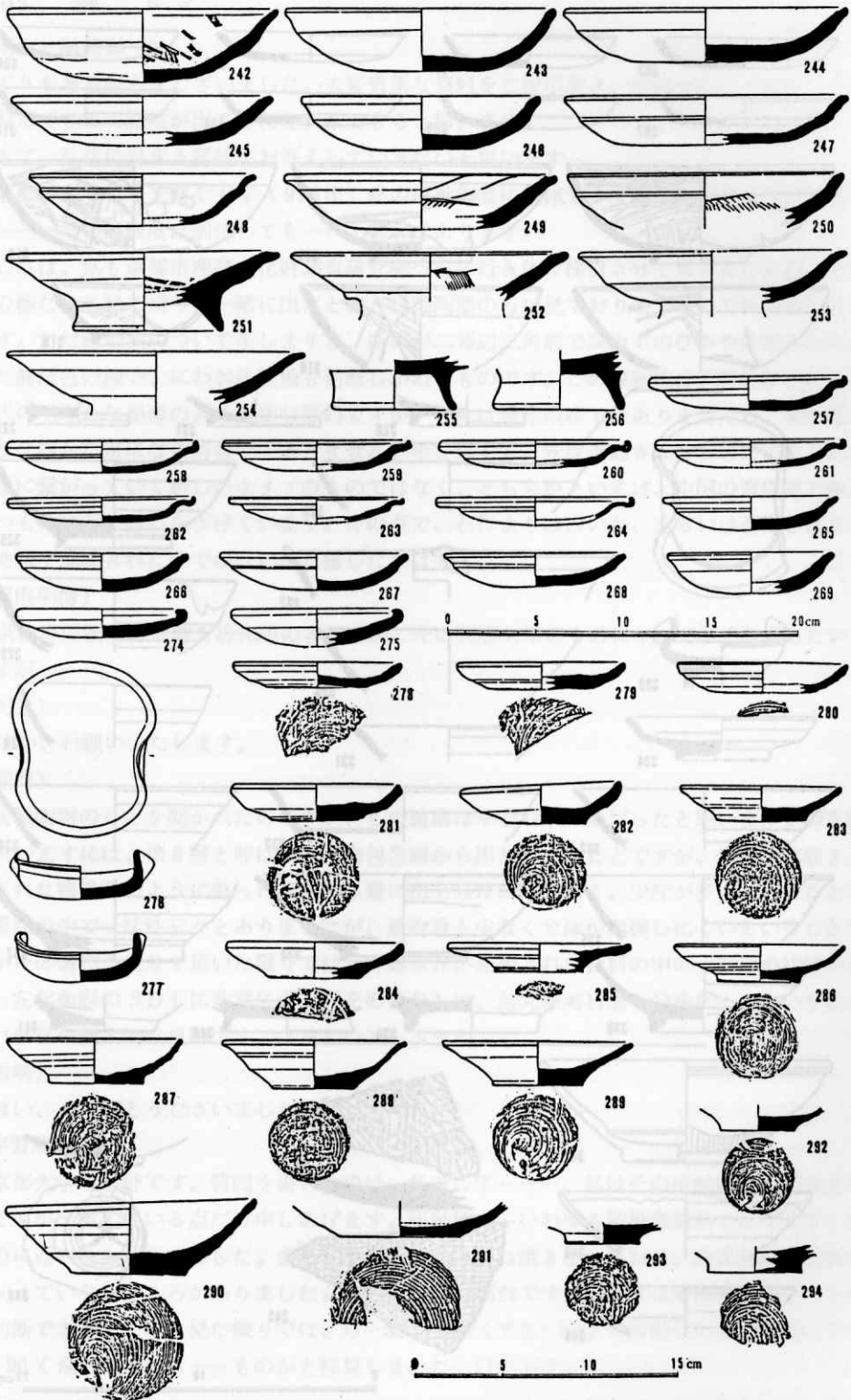
第3図 鴨遺跡出土 土師器, 須恵器等

またE 223~226と同じタイプの土師器の大皿です。輸入陶磁では、白磁碗が伴出しています。また、黒色土器——私は、これはそれまでの平安時代の黒色土器ではなく、瓦器の影響を受けて成立したものであることから「近江型黒色土器」と呼んで区別していますが——の大碗(内黒)、小碗、小皿(両黒)も出土しています。地方色は土師器にもみられ、先に述べた京都などでみられるものと、器壁が厚ぼたく極めて在地性の強い皿、それに加えて滋賀県内ではみられないロクロ成形した土師器もかなり混っており、その中には耳皿もみられます。

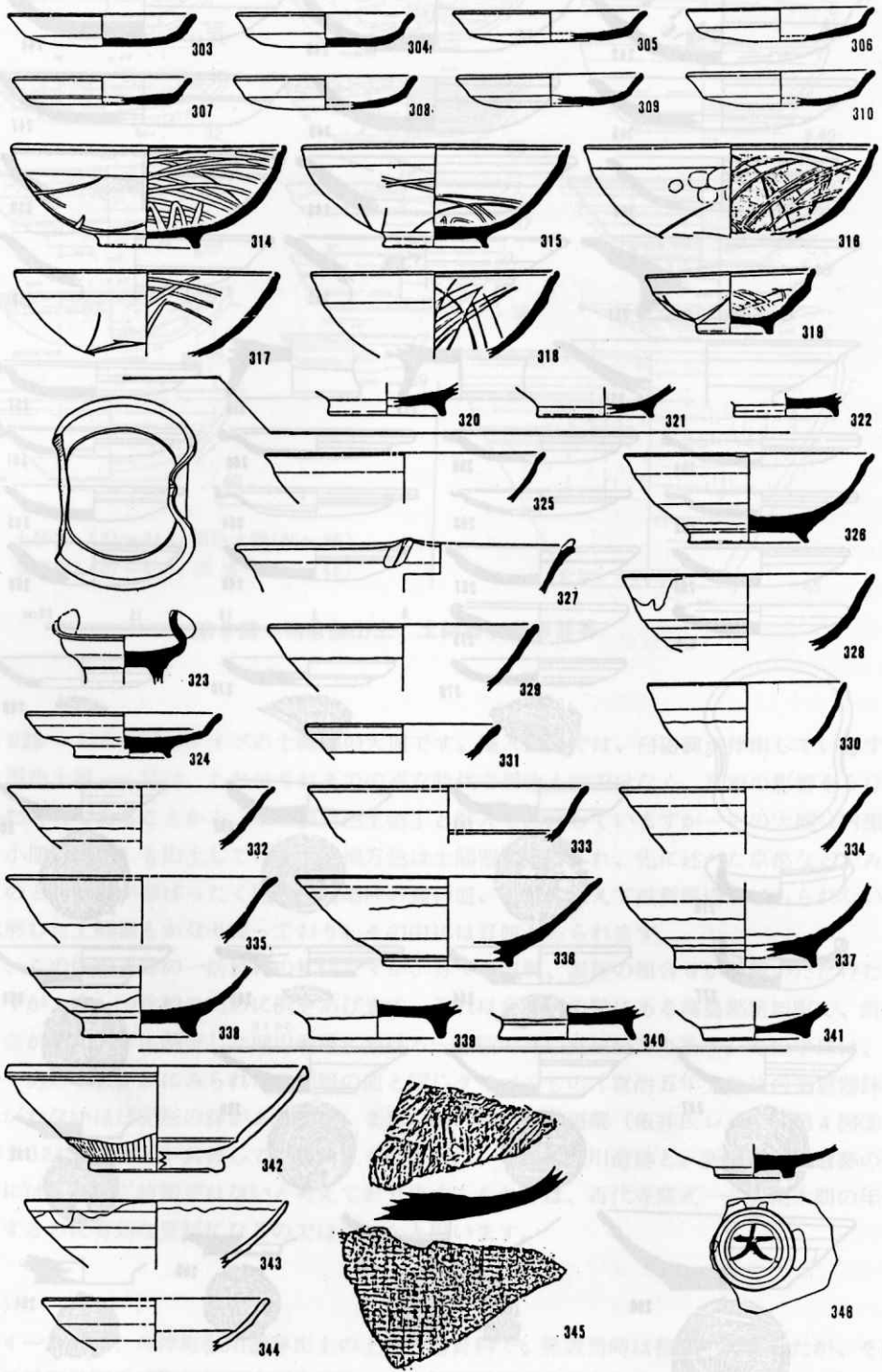
さて、この弘川遺跡の一括資料の年代ですが、各々の器形、器種の組合せが理解いただけたと思いますが、今一つ比較のために例をあげます。それは今津町の隣にある高島郡新旭町で、町教育委員会が昭和50年に調査した堀川遺跡における一括性の高い資料があります。その中には、左京四条一坊のSE08にみられた土師器の皿と同じタイプのもの「寛治五年」の銘の須恵器鉢と寸分たがわないほぼ完形の鉢があります。また、輸入陶磁も白磁碗(亀井氏レジュメ第4図②、(本書P131))などが相伴しています。このように、今津町弘川遺跡と、新旭町堀川遺跡の遺物の間には、さほど時期差はないと考えております。これらは、百代寺窯式——灰釉末期の年代を設定するのに有効な資料になるのではないかと思います。

(補注)

第4~5図は、今津町弘川遺跡出土の土坑一括資料で、発表当時は整理中であつたが、その後『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ-3』滋賀県教育委員会・昭56として刊行されたので、関係分を本書に掲載した。



第4図 弘川遺跡土坑一括資料(1) 全て土師器 (278~294はロクロ土師)



第5図 弘川遺跡土坑一括資料(2) 303~310, 319 近江型黒色土器(両黒); 314~318, 320~322 同左(内黒)  
 323~34 灰釉・山茶碗; 342~344 白磁; 345 須恵質; 346 表土出土